

### 3. 合併の頃 菅野 正彦(愛知教育大学名誉教授)

都留久夫先生の「最初の一年」[『中世英文学談話会会報』22 (1984)]によると、僅か 6 名で始まった東の第一回・中世英文学談話会(談話会)は丁度 50 年前の 1955 年に明治学院大学で開催された。他方、西の中世英文学研究会(研究会)は、それから 10 年遅れて 1965 年に同志社大学で開かれることになる。発足当時の名簿によると、談話会の会員数は 57 名、研究会の会員数は 47 名であったが、1982 年には会員数は着実に伸び、それぞれ 236 名と 148 名となった。

1963 年に岐阜薬科大学に赴任し一般教養の英語を担当した。年二回の例会と、その後の懇親会等には可能な限り出席し、友達と言葉を交わすことが最高の気晴らしでかつ楽しみであった。1969 年に愛知教育大学に移ってから、この気持ちは変わらなかった。このように、研究会から受けた研究の喜びや刺激は実に大きかった。

1985 年、日本経済の絶頂期に西の研究会と東の談話会が合併し、日本中世英語英文学会と命名され、念願の全国大会が誕生した。各支部の特色を残すために、年 1 回、6 月にそれぞれ発表会が行われている。合併を期に、研究発表が終わると会員相互の意思疎通を積極的に計るために、二次会等で中世英語英文学について熱く語り合った。

初代会長に松浪有先生が就任された。合併に至る経緯は寺澤芳雄先生(第三代会長)の「談話会 30 年の歩みに思う」[『会報』22(1984)]に譲るとして、ここでは会員の増加、国際的な役割の期待、学会の更なる発展のみを指摘しておこう。1984 年に第四回チョーサー学会がヨーク大学で開かれ、繁尾、池上夫妻、安東、松田(英)、下笠の諸先生をはじめ、30 名近い人がわが国から参加した。機はずでに熟していたが、合併は英断であり、先見の明があった。

1985 年から 86 年にかけて、在外研究員としてイギリスの Sheffield 大学に留学し、第一回の設立大会に参加できなかった。しかし、帰国した年、中京大学で開催された大会で野地さんの研究発表の司会を務め、翌年から宮崎(委員長)、池上昌、石井、米倉、吉野、池上恵子(書記)の諸先生からなる大会準備委員会の一員として会の仕事に携わった。その年、早稲田大学の大会で発表者に辞退者が出たため、準備委員だからという理由でその穴埋めをさせられた苦い経験がある。

委員会は慣例として、大会前日に開かれ、終了後に発表者から送られたレジュメを一枚一枚折って 'Stock File' に詰め込む手間と時間の掛かる作業があった。この紺のファイルは参加者に喜ばれたが、残念ながら数年で姿を消した。ファイルの魅力に惹かれて入会する人がいるという話を聞いた。

当時、Thatcher 首相は緊縮財政を掲げ、その下で大学改革を推し進めていた。ある日、Sheffield 大学の Norman Blake 教授が、わが国で中世英語を専攻する人が増える理由を尋ねられた。かつて、英文学会での発表会場は小教室一つでこと足りたが、魅力的な先生のお陰で会員数が増えたとお答えした。昔を知っているものにとっては、隔世の感がある。古英語や中英語のような過去の遺物が、日本で人気を博すわけを知りたいと思われたのであろう。学会の拡大は先生との人間関係と、その魅力にあると力説しておいた。上述のように、80 年代後半から学会

活動は盛んになり、入会する人も着実に増えた。「我々は自己の特殊研究を、今日の世界の学会における英語・英文学研究の中に位置づける努力を怠ってはならないと思う」という寺澤先生のおことば通り、優れた学者を海外から招聘して、講演会やシンポジウムが実施されている。

会員の伸びの鈍化の一因は、実用英語が蔓延るあまり古い英語が敬遠されるところにある。会話が大事で古い英語は用なし、というのはずぶの素人考えである。人間は生き甲斐が必要である。私事になるが、40年以上、学生に英語を教えたが Chaucer や Gower の英語を教えたことは殆どない。毎日、机の上で中英語を読み、論文を書き続けてきた。時代に恵まれ、周囲の善意に救われた面もあるが、身過ぎ世過ぎ(生活)のための英語と、生き甲斐(楽しみ)のための英語とを使い分ければよいと割り切ってきた。

率直に白状すると、これまで拙い英語が大学で通用したのは、中世英語英文学会と、Chaucer と Gower のようなあまり実社会と縁のない英語のお陰であった。設立時から会員相互の親睦を目指した「形式ばらない」(informal) 人間関係と、古・中英語への研究意欲を失いたくないものだ。